

ちよつといひ話

～佛の姿を親とぞ思う～

21年3月1日

「親も亡く、子も離れし、我が身なれば、佛の姿を親とぞ思う」一句作ってみました。後ろの親とは勿論西方極樂の主、阿弥陀様もちろんの事です。

仏陀べんえい辨栄聖者が大正6年、最後に残されたお言葉は「如来（阿弥陀様等）はいつもましますけれども衆生（我々）は知らない。それを（我々に）知らせにきたのが辨栄である」と言われました。即ち、気づかないでいるけれども佛様がいらっしゃるから我々は生きていられるのだと言う事でしょう。

目の前の両親の存在感は何処にあって、何処に求められているのでしょうか。義務教育中を含め子供が親に色々な要求を出してきてもそれ自体は決して悪い事ではありません。唯、本人を含め家庭の事情も考える中で何に協力し、何を我慢させ、そして将来的にもだめな物はだめとはっきり了解させる事です。

社会生活を営む上で重要な事は60歳（還暦）をもって大黒柱としての親を卒業出来る様に努力するべきであると思います。会社でいえば社長を退任し会長に成る人事です。家庭にあっては大黒柱としての親から退き、大黒柱としての地位を息子ゆずに譲り、祖父、祖母となつて家庭を見守る事です。しかし現況をみますと、結婚する者の高齢化、未結婚者の増加、少子化を含め親から子へ、子から孫へと順送りの構図が崩れてきている様です。一つ考えられる事は国の福祉補助事業の充実から家庭で老人としよりの世話をしなくても良く成って来た為でしょう。しかしながら今年のように法人税や所得税よに因る税収の落ち込みしんこくが深刻になれば、果たして何時まで補助システムが維持されるか心配です。自由主義、自由経済の日本に於いては能力の差から貧富の差が出るのは当然の事です。借金いっの家に住み、借金いっの車に乗り、等々色々借金をし、ローン返済の為に夫婦で働き、予想外の事態が起きれば損してでも手放なす事になり、やがて生活苦から昔の家族形態のように大家族で住む様に成り、各々の家庭で福祉厚生をしなければならなく成って来るのではなかろうか。多額の納税をして下さる会社や個人の方々にお世話こわに成れる間は問題無いのですが。社会の構図が壊れた時を考えますと親が義務を果たせば子は恩を親に返すのは当然の事でしょう。逆もまた真成りか。昔からの訓告に「親は苦勞し、子は樂をし、孫は乞食をする」とあります。即ち、信心が基盤にある家庭か否か。亡き親の供養は阿弥陀様とおこた思い怠る事のないように、子には佛の親としての手本を示し、家庭は「和を以って尊し」を教訓とし、何事にも感謝出来る様に成れば、天地の恵みが頂けるはずで。善哉

善壽界善入院油掛地藏尊